黒田三郎日記 戦後篇 I

黒田三郎日記　戦後篇I

一九八一年四月一日　初版第一刷発行

著者　黒田三郎

発行者　小田久郎

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　凸版印刷株式会社

発行所　株式会社思潮社　東京都新宿区市谷砂土原町三―十五

電話　東京二六七局八一四一番（代）振替東京八―八一二一番

定価　二四〇〇円　1395-205001-3016

黒田三郎日記 戦後篇 I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一冊（昭和二十一年七月五日――八月十二日）　八
第二冊（昭和二十一年八月十二日――十一月二十五日）　四九
第三冊（昭和二十一年十一月二十八日――二十二年三月二十一日）　一〇〇
第四冊（昭和二十二年三月二十三日――五月九日）　一五三
第五冊（昭和二十二年五月九日――十月二十五日）　二〇三
註　三三三
解説　北村太郎　三三七

凡例

一、本文は日記の原ノートを底本とし、原型通りに起こすことを原則とした。

一、表記は新字体・新仮名遣いに統一した。

ただし、次の場合は訂正した。

1　明らかな誤字・脱字。

2　踊り字（〳〵）。

3　漢字表記で読みにくいものは送り仮名・ルビをおぎなった。

例　不拘→拘らず　徒に→徒らに

4　編集部で人名等、適宜おぎなったものは（　）内8ポイント活字で明示した。

次の場合は原文のままとした。

1　外来語・外国人名の表記

2　送り仮名

3　著者特有の表記

一、書名、雑誌名はすべて「　」で統一した。

一、本文、註は光子未亡人による校閲をへた。

一、以上の他、日記の原文章に、改変を加えていない。

題字・青山杉雨

黒田三郎日記〔戦後篇〕 I

〔第一冊〕

七月五日

北園克衛氏[1]宛はがき

「あなたがどうして御暮しなのか、果してどこで生きておいでなのか、はじめてのはがきをかくことが非常に不安です。僕は昨日動乱中のジャワからかえって来て昔ながらの自分の家に、見知らない人人と雑居して、ぼんやりと、果てしない焼けあとに眼をやったりしています。

何事をも求めることもなく、野心もなく、かえって、さっぱりした、その日の意味がただその日の上にのみあるような、そんな日を、気持だけはボヘミヤンのように、呑気にすごしたい、と思っています。

若し、運よくこのはがきがお手に入りましたら御返事下さい。そうなることをただ祈っています。」

宮内君[2]も勝田君もどこにいて、生きているやら死んでいるやらもわからない。

七月六日

リルケとキェルケゴールの数冊の訳本が、焼失した本の中にはいらなかったのは、せめてもの幸いであった。三年半ジャワにいた自分というものは急速に消え失せ、三年半昔内地にいた自分というものの崩れ落ちた残骸がもとの姿になろうとせんのない動きをはじめたようでもある。何れにしても、この三年半にも拘らず、世の移り変りに些かも顔色を変じない己れがいるようである。ただ一変した

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

世の中の流れをつきとめようとする激しい探究欲の前に、多くの書物と多くの文字が、味も色も失って古ぼけた書棚に並んでいるのも事実である。

住みなれた我が家に目下四家族が雑居している。絶えまない訪客。赤ん坊が泣く。生活苦にひしがれたひそひそ話。その中で野良犬のように、くたびれ乍ら、うろうろうろうろしている。隣家では朝から夜までラジオがしゃべったり、歌ったり、奏でたりしている。栓のしまらない水道の水が滴り落ちている。一日に名古屋で打った電報がつく。

七月七日　日

煙草の配給。「きんし」四十本。「みのり」一袋。「のぞみ」若干量。

母と妹と弟とを養う[3]以外に何等の望みも、楽しみをも持たないでかえって来た僕が、一昨日からぼんやり家にいて宮原晃一郎訳「憂愁の哲理」をよんでいる。庭には南瓜の花が咲き、鉢にはトマトがのびている。

昨日兄は東京へ発った。

だれでもが、自分がいちばんひどい目に遭ったような気持でいる。此の一年偏狭な胸と顔とに恐しく悩まされてきた。そして益々ひどくなる。豚に食われてしまえ！　とときどき思うことがある。

四日の夕刻に満洲から引揚げて来た佐多一家が自分の家へ引移る。少々ほっとする。

書物の整理。社会科学の本が殆ど全部失われたのは痛手である。「資本論」以下マルクス、エンゲルス、レーニンのものは一冊もない。シュンペエタもなければケインズもない。全く何もない。そし

てボオにしても、リラダンにしても、ロレンスにしても昔足を棒にして蒐集したものの中から無惨に一部がどこかへ引裂かれている。

七月八日　月

梅雨がまだ上らぬ。

「知り過ぎることも怖いし、知らなさ過ぎることも恐しいのである。」（「憂愁の哲理」六九頁）そしてひとは常に知り過ぎるか知らなさ過ぎるかの何れかである。彼が幸福なる者でないならば。

七月九日　火

昨日は吉田氏と日根嬢から母へ宛てて手紙が来た。日根嬢は六月十五日、吉田氏は十七日、夫々シンガポール、ジュロンのキャンプを出発したのだが、そのときはまだ十八日に僕が出発するとはわからなかった。

「あれかこれか」ではない。「あれでもない。これでもない。」に尽きる。彼の生活はかくして飢食になるにすぎぬ。「あれでもない、これでもない。」によって食い尽されるのである。

僕にはキェルケゴールの云うことは殆どよくわからない。だがわからないというには余り魅惑的である。

岩元君[4]がくる。学校でドイツ語と財政金融の講座を持っているという。この次には、新円発行の意義についてよくこの学者にきいておかねばならぬ。此の地方の文化の担い手。

僕はジャワにいた女[3]のことを思っている。廃墟になった町を歩いていても、夕飯の坐についていても、若しも彼女が同席していたら彼女に話かけられるべく言葉を常に用意しているのである。

七月十日　水

僕はたしかにひとつの眼鏡を持っていたようである。その眼鏡の中に人生が慌しく或いはゆるやかに時には優しく時には荒々しく姿を現わした。そして今自分は自分の持っていた眼鏡をいつのまにかなくしてしまったのではないか、と恐ろしく不安な気がしている。キェルケゴールにしろ、ニイチェにしろ、それが何であろう。他人がある。彼らが何を云い何を行ったにしろ、それは他人のことである。かつて僕は自分の眼鏡をつくるのに彼等の助力を乞うたかもしれぬ。僕は彼らから多くを盗み出したものである。だが、眼鏡は失われた。抽出の中や書物の頁をパラパラやって探してみても、そしてたとえどこかで見つけ出されたとしても、それが今でも僕によく合うか、度が外れていないか新たな不安が生ずるのみである。すぎ去ったことはとりかえしがつかぬ。とりかえしがつくと考えるのは、とりかえしのつかぬことをとりかえしがつかぬと云い切ることの出来ない怯懦から、単に未来に過去を夢みるにすぎない。たとえ人の自然の情からとりかえしをつけようととりかえしのつかない過去を、遡って未来に夢みるのが、当然であるとしても、とりかえしのつかないことはとりかえしがつかぬ、と断定する勇気が必要である。

それにしてもこういう不安やこういう考えは、ジャワに於いてはなかったことのようである。新しい日がこうしてはじまってくるのかもしれない。

兎も角も、ジャワ渡航以前にものされた自分の三冊の詩集及一冊の評論集一冊の翻訳[6]は、はっきりと思い切らねばならぬ。それは恐らくアメリカ爆撃機によって灰と化したのである。

汾陽君と町で逢う。「人民新聞」の集配をやっているという。

森正蔵「旋風二十年」上巻を買い一読する。興味はある。だがそれだけのことである。ここからは何らの史観も出て来なければ、思想も批判も生じない。論者は何故に「昭和裏面史」という限定された立場に、旧態依然たる立場に立止らなければならぬのか。個人の羅列からは歪曲された歴史の一面が楽屋咄の如く語られるのみである。当時著者自身もこの社会にひとつの役割を担っていたのである。著者以外の何百万何千万の日本人ひとりひとりも。彼等は意識するとせぬとに関わらず如何なる役割を果していたか。

N・レーニン「帝国主義論」に手をつける。もう七年か八年昔僕は之と「唯物論と経験批判論」とに熱中したものである。生半可なよみ方をしてしかも、それでも、熱中するには十分だったのである。今またこの本をよみ直そうとしている。記憶をよび返すことが現在の最も大きな仕事のようでもある。

「帝国主義論」を収めた「世界大思想全集」30一冊が残ったことは、幸か不幸か、知らない。

二足の短靴の裏に三六個の鋲を打ち、四〇円を支払う。配給衣料を買うためにデパートの入口から舗道に迄あふれた人の列を見て断念、三伏の町へかえる。

ひとつのプラン

読書表（予定）

七月十一日	木	キェルケゴール「憂愁の哲理」	レーニン「帝国主義論」
十二日	金	同　右	マルクス「経済学批判序説」
十三日	土	同　右	マルクス「経済学批判」
十四日	日	同　右	同　右
十五日	月	キェルケゴール「哲学的断片、後書」	同　右
十六日	火	同　右	マルクス「価値価格及利潤」
十七日	水	同　右	マルクス「賃金労働及資本」
十八日	木	キェルケゴール「不安の概念」	
十九日	金	同　右	同　右
二十日	土	同　右	同　右
二十一日	日	同　右	同　右
二十二日	月	キェルケゴール「死に至る病」	同　右
二十三日	火	同　右	同　右
二十四日	水	同　右	同　右
二十五日	木	同　右	同　右

二十六日　金　キェルケゴール「キェルケゴールの言葉」　同　右
二十七日　土　同　右　同　右
二十八日　日　同　右
二十九日　月　同　右
三十日　火　同　右
三十一日　水　同　右
八月　一日　木　同　右
二日　金　同　右
三日　土　同　右

右は基礎的な、むしろ、記憶の覚醒のため、行なわれるべきであって、其の間、最近数年、或いは最近数日の政治的経済的思想的動向、日常生活の片鱗が数学的或いは個人的等々あらゆる様相の下に把握されねばならぬ。それがため、「新聞」「雑誌」「法令集」「経済統計」等手に入るもののすべてを読破、各界文化人の動向を観察し、且つ、実際に、自己の眼で町の生活を十分に把握しなければならぬ。

七月十一日　木

眠くてしょうがなく、朝から居眠りをしている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.